

バレンタインショック（卵子老化の現実）

2012年2月14日、バレンタインの日にNHKのクローズアップ現代で「産みたいのに産めない～卵子老化の衝撃～」という番組が放送されました。内容は『35歳を超えると妊娠がしづらくなる。卵子は老化して年齢があがるにつれ妊娠する確率がさがってくる』という内容でした。

それまでは、医療サイドとしては、「患者さんに年齢のことをいうと失礼にあたる。また、当然年齢があがると妊娠しないことは患者さんは知っている」と多くの医師が考えていました。

一方、患者さんサイドとしては「結婚したら子供は自然にさずかるものだ。週刊誌や女性誌では40代の芸能人の妊娠・出産の報道がされている。50歳ぐらいまでは妊娠できるのではないか」という、誤った認識がありました。

一般の方はある意味、不妊症に対してぼんやりと他人事みたいな認識にあったわけです。



私が医師になった1980年代は「不妊症のカップルは10組に1組という割合でいる」と教育されたのですが、結婚年齢があがり、今や（2020年現在）6組に1組のカップルが不妊症で悩んでいると言われていています。

このような報道があり、不妊症の患者に関して医療サイドは積極的に年齢を考慮して治療のstep upを勧めるようになっていています。いまや、年間約95万の出生数のうち、6万人近くが生殖医療（ART：体外受精・顕微授精等の治療による医療）で妊娠しています。

ただ、生殖医療で妊娠する確率も35歳あたりから徐々に減少し、40代になると妊娠する確率がぐっと低くなるのが現実です。

添付の図は2018年に日本で生殖医療を受けた方の、胚移植（卵を移植する）あたりの妊娠率を年齢別に示したものです。40歳では胚移植あたりの妊娠率は10%未満となります。これは卵子を採取し、実際、移植に至った方の妊娠率で、年齢が高いと卵子がとれても胚移植まで至らない方の割合も増えるので実際の治療で妊娠する方はもっと少ない割合になります。

日本での不妊症の定義は「妊娠を望む健康な男女が避妊をしないで性交をしているにも関わらず一定期間妊娠しないもの」とされています。

「一定期間」に関し、ほんの数年前までは2年間としていましたが、結婚年齢があがり2020年現在は1年とされています。

女性の生殖は男性とは全く異なり卵子の数も年々減少し、質も低下することを認識していただきたい。

そのためには公的教育の中で、こういう知識を広く扱いより若い年齢から「子供を産む」ことを認識いただきたいと願っています。

作成：南 晋



ART妊娠率・生産率・流産率 2018

